

---

around me

虹雪まい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

around me

### 【Nコード】

N8164L

### 【作者名】

虹雪まい

### 【あらすじ】

だれしもきつと、一度や二度は物語に憧れを抱くもの。「あの映画のヒロインになりたい」「あの漫画の主人公になりたい」「あの推理小説の主人公のように犯人を追い詰めたい」・・・でも、日常にも意外とドラマは潜んでいるのです。そんな日常のドラマを切り取った、笑いと涙のストーリー。ちよつと疲れたあなたに捧ぐほんわかエピソード短編集です。

episode 1 伝えたい言葉（文学系）（前書き）

これらの作品は全て虹雪まい本人、またその家族や友人から伝え聞いた体験談のところどころに脚色を加えたものです。半ノンフィクションと言ったらいいでしょうかね。

掲載している作品の全てにおいてその体験者や登場する人物には許可を得ておりますのでご理解のほどよろしく願います。

あくまでも『半ノンフィクション』なので事実と異なる点多く存在しています。また私の記憶が定かでない部分はかなり曖昧な記述もあるかと思いますが、温かく見守って頂けると幸いです。

・・・では、長々と語りましたが本編へどうぞっ

episode 1 伝えたい言葉（文学系）

ゆっくりと時が流れていた。

葬儀全般の終了のあと、焼香を終えた親族が孫である私の前を横切っていく。祖父を亡くしたばかりの私を気遣い、また、一人暮らしとなる祖母を見てやってくれと私に頼むために、何人もの親族が私に声をかけてくれた。

遺族となった父、母、祖母は、私に荷物を預けて私の背後、式場の入口で忌中引きの料理と粗品を親族に手渡している。ちなみにもうでもいい話ではあるが粗品は椎茸<sup>しいたけ</sup>だ。

そんなこんなで私は、式場最前列に取り残されている。好き好んで残ったのだから『取り残された』と言う表現は間違いかもしれないが。

ここ数日、親類に囲まれて生活していたためか、やけに静かに感じられるのが少しさみしい。とはいえ、背後から聞こえる沢山の靴音があるため、明らかに学校の授業なんかよりはうるさいはずだが。

膝の上に家族の荷物を乗せて、私は目の前の祭壇を見上げた。

祖父の遺影。先程お骨を拾ったというのに、私はまだあんなに元気だった祖父が亡くなったということが信じられなかった。

三週間前には一緒にお寿司を食べた祖父。また、家族みんなが大好きな焼鳥と一緒に食べに行くぞと、笑っていたあのじいちゃんの写真をもつ、見ることはないのだ。

背後で聞こえていた、たくさんの靴音が減ってきた。私は何度か祖母や両親を振り返り、様子を確認した後、再び祭壇を見上げた。まだ、時間がかかりそうだったから。

そういえば祖父とはあまりまともに話をしたことはなかったかもしれない、と、ふと思う。幼い頃はよく公園や海、山、色々なところへ連れて行ってもらったものだったが、ここ最近、まともな会話はしていなかった。

それは喧嘩をしたからとか、仲が悪いからではなくて、祖父も私も、どことなく話すのが恥ずかしかったのかもしれない。なぜかと言われれば答えに困るが、しいて言うならば私がなかなか時間をとれず、祖父母に会いに行かなくなったのがその原因の一つだろう。そんなこともあって一つだけ、私はこのお葬式全般にあたり、後悔していることがあった。祖母も母も、棺に花を捧げる際にかけていた言葉。心に何度も浮かんだのに、私は一度も口に出すことができていなかった。

恥ずかしかったのか、はたまた言ってしまうえば涙を堪え切れなくなることを心のどこかで感じていたのか。私自身よくわからない感情が、その言葉を私の口から出させなかった。

そんなとき、すぐ背後で二つ、三つ、靴音が聞こえた。なんの変哲もない、少し大きめの靴であろう固い足音である。普段物音をあまりたてない父の足音にしては大きいようにも思える。

私の右斜め後ろあたりで止まったその靴音に、私は何の気無しに振り返った。

「・・・！」

私は、一瞬自分の目を疑った。

そこには、誰もいなかった。

それでも、私はすぐにその状況を飲み込むことができた。今思えば、不思議なほどに落ち着いていた。

そして私は、何も無い何も見えないその場所に向かって、そっと念おもった。

「里沙、荷物ありがとう。」

「あ、うん。お疲れ様。これで、帰るんだよね？」

「うん。里沙も疲れたでしょ？」

「母さんやばあちゃんよりマシっ。」

「・・・もう、ほんとにあんたは」

「さて、帰り支度しなきゃだねっ。」

言わなくても伝わってたんだね。でもやっぱり、伝えなくてごめんなさい。これからは、もっとたくさん遊びに行くから。ばあちゃんが寂しがらないように。だから見守っててください。

「今まで、ありがとう。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8164/>

---

around me

2010年10月10日01時29分発行